

→ウクライナの首都キエフ市郊外の大祖国戦争史博物館(<http://www.warmuseum.kiev.ua>)内の「記憶の間」。中央の長細いテーブルには死亡通知などが置かれ、それを取り巻くように数千の遺影が下げられている。この先には「英雄」の名を刻んだ「栄誉の間」がある
↓同博物館の上部には台座を含め高さ102mの巨大な女性像「祖国・母」がそびえ立つ

写真提供：筆者（いずれも）



リレーエッセイ

海外派遣
専門家たより

過去と どう向き合うか

ロシア、ウクライナの街を歩く

うめつ のりお
梅津紀雄

工学院大学・東京国際大学講師



時期の点からいえば、昨年は終戦60周年の節目を迎えて、関連の出版物も多く、独ソ戦関連の文献収集には好都合であったし、今年（戦時中も活発に創作を続けていた）作

このたび、ジャパンフアウンデーションの知的交流フェローシップ（派遣）により、ロシアに48日間滞在し、史料調査を行なった。今回の研究テーマは「ソヴィエト・ロシアにおける戦争と芸術・メディアとしての音楽」とであった。ここでの「戦争」とはロシアでの呼称で言えば「大祖国戦争」、すなわち第二次世界大戦時の独ソ戦（1941～45年）を指す。具体的には、独ソ戦の時期に音楽がどのような役割を果たしたか、そして、戦時中に一定の役割を果たした音楽がその後のロシアでどのような扱いを受けているか、どのように記述（説明）され続けているか、ということがテーマであった。

作曲家シヨスタコヴィチの生誕100周年にあたり、関連イベントが多く、実り多い滞在となった。しかし、一般に「過去とどう向き合うか」という点についていえば、それは必ずしも文献収集においてのみ考え得る問題ではなく、日々の生活や観光のなかでもさまざまな視座を得ることができるものである。

以前

から気になつていたり、ロシアの都市の街並みには、記憶を喚起するさまざまな「装置」が据えられている。街を歩きながら気づくことは、著名人の銅像が数多く町中に据えられ、著名人の名前を冠した通りが数多く存在し、そして著名人の顔をかたどったレリーフがエピソードの記述とともに建物の壁に多数データえられていることである。レーニンをはじめとした政治家はもちろんだが、軍人、科学者、作家、作曲家、演出家、俳優、画家などといった、さまざまな著名人がその対象である。レリーフには説明が必要かも



うめつ のりお●2000年、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程満期退学。東京大学大学院助手（総合文化研究科地域文化研究専攻）を経て、02年より現職。ロシア芸術史・表象文化論専攻。著書（分担執筆）に『シヨスタコヴィチ大研究』『ロシア音楽ハンドブック』（近刊）。共訳書にホブローヴァほか『ロシア音楽史Ⅰ』、マース『ロシア音楽史』



サンクトペテルブルグのロシア国立図書館の外壁に設置されているレリーフ。ウラディミール・スターソフ（1824～1906年）は、芸術批評家で、その著作はソ連時代にも大きな影響力を持った

知らない。サンクトペテルブルグの国民図書館の壁にある芸術批評家スターソフのレリーフは典型的なもので、肖像とともに「ここ」で1855年から1906年までロシア文化の傑出した活動家スターソフが働いた」と文字が刻まれている。これに対して、いささか些末と思われるようなエピソードもレリーフと化している。たとえば、モスクワのクリヴォコレンヌイ横町にある詩人プーシキンのレリーフには「この詩人ヴェネヴィチノフの家で、1826年にA・S・プーシキンが悲劇『ポリース・ゴドゥノフ』を読んだ」とある。モスクワやペテ

ルブルグでは、このようなレリーフの数々を日常的に目にすることができる。さながら、街中が観光地であるかのようだ。

いわ

ゆる観光地においても、過去を喚起する「装置」の存在は顕著である。とりわけモスクワの街では、大祖国戦争の記憶が今なお鮮明に息づいていることが感じとれる。たとえば、観光拠点の一つであり、モスクワのシンボルとして有名な赤の広場の横には無名戦士の墓があり、激戦地となつた都市の名前が刻まれている。もちろん、無名戦士の墓は各国にあるのだが、ここモスクワでは中心部の観光名所と一体になっていることによつて際だつている。

地方都市の観光地においても似たことを感じとることができ

る。たとえば、「琥珀の間」で知られるツァールスコエ・セロのエカテリーナ宮殿を訪れて驚いたことは、どの広間にも、戦前の写真とともに独ソ戦で破壊された直後の写真がパネルで

展示されていたことである。ここに見て取れるのは、ナチス軍に蹂躪されたという被害者意識と、それを克服して復元したことの誇りであろう。

視察で足をのびしたキエフで、ソフィヤ大聖堂やペテルスカ修道院といった著名な観光地以上に私の興味を誘つたのは、修道院のそばに位置する「大祖国戦争史博物館」であつた（1974年開館）。展示のクライマックスとして意図された「記憶の間」には、さまざまな遺品や死亡通知書を取り巻くように、壁際に数千の写真（遺影）が下げられており、圧倒的な印象を観る者に与える（靖国神社内の遊就館にも遺影を並べた展示があるが、デザインや受ける印象は大きく異なる）。これぞ「記憶への意志」だと私は感じた。

最後

に笑い話を。キエフでの宿泊のためにホテル「ウクライナ」を予約した私は、到着後に初めて、数年前のガイドブックに掲載されている住所がヴァウチャー

（予約保証書）の住所と異なることに気がついた。ヴァウチャーの住所を古いガイドブックで確認してみると、ホテル「モスクワ」があつたはずの場所である。半信半疑のまま赴いてみると、キエフ市のメインストリート、フレシチャーチク通りの中心にある独立広場（旧革命広場）の奥に、確かにホテル「ウクライナ」がそびえ立っていた。私は理解した。キエフの中心というべき場所に、かつてはホテル「モスクワ」があつた。しかしその過去は消し去られたのだという

キエフのメインストリート、フレシチャーチク通りと独立広場（旧革命広場）。ホテル「ウクライナ」より見下ろして

